

看護教育におけるデス・エデュケーションの方法と生涯教育への応用

關 戸 啓 子*¹

要 約

看護教育におけるデス・エデュケーションの方法を調査した。結果、次の5つの教授方法が抽出された。

- (1) 特別講演とゼミナールの組合せ型教授方法
- (2) テレビドキュメンタリー番組の利用による教授方法
- (3) グループ・ワーク型教授方法
- (4) シミュレーションゲームによる教授方法
- (5) 自分の死をイメージさせる教授方法

これらの教授方法が、生涯教育におけるデス・エデュケーションの方法として応用できないか検討した。それぞれ、応用する場合に考慮を要する点はあるが、有効性も示唆された。看護教育からの応用であり、看護者が経験を生かして関わることによって、実施の可能性はあると考えられた。

はじめに

現在の日本においては、多くの人が病院で死を迎えており、死は日常生活から隔絶されている。その一方で、治療は医師に任せきりであった時代から、患者が自分の治療を選択する時代が変わろうとしている。つまり、人は自分の人生最期の期間をどう過ごすのか、普段から考えておかなければならないのである。このような理由から、生涯教育としてのデス・エデュケーションの必要性は高いといわれている¹⁾。しかし、日本においてどの程度デス・エデュケーションが実施されているのか現状をみると、まだまだ模索段階であり、今後発展期を迎えるためには、教育内容や方法についての検討が必要であることが示唆²⁾されている。そこで、デス・エデュケーションの方法を検討するにあたり、看護教育ですでに実践されているデス・エデュケーションの方法が応用できないかと考えた。日本でも死の教育に対する関心が著しく高まっているが、日本では、小・中・高校のどのカリキュラムの中にも、死の教育の課題は含まれておらず、わずかに、医学・看護教育の中で、一部取り上げられているものの、時間数および内容的に著しい不備が指摘されている³⁾。確かに、

看護教育においても、各教科目の中で、必要に応じて取り上げられているのが現状であろう。しかし、他の分野に比べれば実績があるともいえ、参考になる実践がある可能性は高い。そこで、看護教育の中で実施されているデス・エデュケーションの方法が紹介されている文献を調査し、各実践ごとに生涯教育としてのデス・エデュケーションに応用する場合の有効性と課題について考察した。本来、生涯教育とは年代に関係なく人間の一生をとおして継続される教育であるが、今回は成人を対象とする場合について検討した。

看護教育におけるデス・エデュケーションの方法

永野ら⁴⁾が、1989(平成元)年から1993(平成5)年の間に我が国の主な看護系学術集会で発表のあった看護学教育研究総数783件を調査した結果、「教育方法とその成果に関する研究」は70件であったが、その中で、死についての教授方法とその学習成果に関するものは、わずか2件であった。この調査年より後の動向を探るために、主要な看護系論文が検索できる「最新看護索引'94」⁵⁾「同'95」⁶⁾「同'96」⁷⁾を調査した。その結果、「教育方法」の項に分類されている文献は、1994(平成6)年には162件、1995

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 保健看護学科
(連絡先) 關戸啓子 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

(平成7)年には146件、1996(平成8)年には158件であった。その中で、死についての教授方法とその学習成果に関するものは、1995(平成7)年に1件、1996(平成8)年に2件のみであった。看護教育においても、いかにデス・エデュケーションが系統的になされていないかを物語る結果であった。しかし、逆に看護教育の中で、積極的にデス・エデュケーションを実施している場合には、その教授方法が報告されている場合も散見する。そこで、本研究では今回の調査で得られた3つの文献と、検索対象外の文献の中でたまたま知りえた2つの実践事例、あわせて5つのデス・エデュケーションの方法を検討対象とする。なお、文献の抽出に際しては、死についての教授方法とその学習成果に関する報告であると思われる題目の論文には、すべて目をとおした。その結果、学習成果のみが紹介され、教授方法が詳しくわからない論文については、今回の研究対象としないために除外した。また、同一の教授方法に対して、対象や評価方法等を変えることによって複数の文献で紹介されている場合には、教授方法が最も具体的に紹介されている文献を採用した。

次に、抽出された5つのデス・エデュケーションの方法と、その特徴について述べる。

1. 特別講演とゼミナールの組合せ型教授方法

小熊らは「『死の準備教育』にゼミナールと特別講演を導入した試み」⁸⁾について報告している。この方法は、期間をあけて哲学者、医師、家族の立場からの特別講演が行われ、その後グループディスカッションを行うという方式である。ディスカッションは、ゼミナール形式で小グループにわかれ、毎回、問題提起者、司会、書記を立てて行われる。教員は、グループメンバーの一人となり、時には指導者、あるいは相談役として行動する。教授方法の評価として「生命の尊重や死という人生の哲学的命題についての答えは、自分の求めるものであり、参加者一人ひとりが発言し討議を重ねながら進めるゼミナール形式が有効であること、また誰もが経験したことのない死ということをより良くイメージするためには、身近な死を体験した人(家族等)の話を書くことも効果的であることが示された。」⁸⁾と述べられている。

この教授方法の特徴は、全員に同じ講演を聞いてもらい導入とし、その後ゼミナールで主体的に個人の考えを熟成させていくという点にある。そこで、「特別講演とゼミナールの組合せ型教授方法」と解釈した。

2. テレビドキュメンタリー番組の利用による教授方法

山本は「テレビドキュメンタリー番組の教材としての利用法」⁹⁾において、がん専門病院で闘病する患者たちのテレビドキュメンタリー番組を取り上げ、教材として使用していることを報告している。デス・エデュケーションとしての実践報告ではないが、内容的にはデス・エデュケーションであると判断したので取り上げた。この教授方法は、テレビドキュメンタリー番組を教材として視聴した後に、その内容についてクラスで討議を行うというものである。この報告で使用されたテレビドキュメンタリー番組はNテレビ局制作「いのち輝いて—がん病棟の子どもたち」であった。教授方法の評価として「映し出される映像には学生の未経験の世界が繰り広げられ、いのちと向き合った人間の生き方は学生たちの感動を引き起こす。」⁹⁾と述べられている。

この教授方法の特徴は、通常では見ることでできない長期にわたる闘病生活やそれを支える人々の存在が、現実のものでありながら数10分で見ることのできるテレビドキュメンタリー番組を利用している点にある。そこで、「テレビドキュメンタリー番組の利用による教授方法」と解釈した。

3. グループ・ワーク型教授方法

關戸らは「看護学生の生命観に影響を与える要因—脳死と臓器移植に焦点を当てて—」¹⁰⁾の中で、生命倫理に関する講義の方法についても報告している。教科目名は医学概論であるが、医師と看護教員が分担して生命倫理に関する講義を系統的に行っている。30時間のうち、前半は講義であるが、後半の数回を使ってグループ・ワークを実施している。方法は、各グループごとに、現在社会問題となっているバイオエシックスに関わるテーマを選び、文献学習を行い、それを全体に発表し討議するという形態である。この学習によって、学生が生命に関する問題について考えたり、悩んだりする機会が与えられ、生命観を培う一助となっている¹⁰⁾ようである。

この教授方法の特徴は、バイオエシックスに関わるテーマを、グループが独自に選択し自主的に調査してグループ討議を重ね、さらに各グループが調査し討議した内容を発表し、全体で討議するという点にある。そこで、「グループ・ワーク型教授方法」と解釈した。

4. シミュレーションゲームによる教授方法

佐藤らは「『老年期を生きる』を理解する授業の展開—シミュレーションゲームを用いて—」¹¹⁾にお

いて、老いを理解するために行われている教授方法を紹介している。これはシミュレーションゲーム“INTO AGING”を日本の状況に合うように工夫した、老いを模擬体験するゲームである。老人看護の領域で高齢者の問題や加齢について実感することを目的に行われるものであるが、最終的にはお墓に入るまで、つまり死を迎えるまでを模擬体験する参加者もいるゲームであるために、デス・エデュケーションの一環として取り上げた。

シミュレーションゲームの内容¹¹⁾は、次のとおりである。学生は、自分が生きたい年齢より5歳引いた年齢の自己イメージを作り、自分の老人像を具体化する。その後、各テーブルを回りいろいろな「生活出来事カード」を引き、運命が決定していく。「生活出来事カード」の内容は、老人施設等で実際の老人から聞き取った出来事によって構成されている。このカードの内容によって、思わぬ病気になったり、耳が遠くなったり、腰が曲がったりという状況が決定される。すると、模擬体験装具を付け、腰が曲がったら、ずっと腰を曲げて動くというように、できる限り実際に近い体験を強えられる。学生は普段イメージできないような困難を次々と体験することになる。その後、体験者全員で自分が最も印象に残ったことや、他の人の体験に対して聞いてみたい内容等についての討論を行う。

この教授方法の特徴は、自分の人生終盤から死までを架空であっても、臨場感あふれる人生終盤のリハーサルとして体験する点にある。そこで、「シミュレーションゲームによる教授方法」と解釈した。

5. 自分の死をイメージさせる教授方法

岩谷は「学生の『死』に対するイメージ」¹²⁾において、学生に自分の人生最期の様子をイメージさせ、イラストレーションを書かせる試みをしている。ただし、これは一教科目の中で「終末期にある患者の看護」を教育する前の導入として行っているもので、系統的にデス・エデュケーションとして実施しているわけではない。しかし、この試みは非常に興味深い。自分の人生最期の様子をイラストレーションとして書かせることは、学生に日頃考えたことのない死について、自分のこととして具体的に考える機会を与えることになり、その意義は大きいといえよう。この教授方法の特徴は、講演を聞いたり、死について話し合ったりする以上に、自分の死をイラストレーションにすることによって、死が対象ではなく自分自身のものとなり迫ってくる点にある。そこで、この教授方法を「自分の死をイメージさせる教授方法」と解釈した。

看護教育におけるデス・エデュケーションの生涯教育への応用

1. 成人学習の特徴による検討

(1) 教授方法の大別

看護教育におけるデス・エデュケーションの実践報告から、5つの教授方法を抽出し、その特徴によって教授方法に名称を付した。この段階で、5つの教授方法にはほぼ共通する過程が含まれていることに気付いた。それぞれ方法は違っても、まず死について考える動機付け、または問題提起を行ってから、そのことを主要な題材として話し合いを行うという過程をたどっている。ただ、動機付けまたは問題提起の仕方と、話し合いの形態は、それぞれ工夫されたものになっている。例外的に「自分の死をイメージさせる教授方法」の場合には、講義の導入として行われた方法であり、その後、講義のなかで随時フォローされるために、話し合いという形態は出てこない。しかし、この教授方法を取り出して考える場合には、自分の人生最期の様子をイラストレーションにしたのみで修了することはありえず、当然話し合いという方法が、その後に用いられるものと思われる。このように、5つの教授方法すべてが「動機付けまたは問題提起」から「話し合い」へという過程をたどっているのである。しかし、主眼をどこに置いているのかには違いがある。

まず、ひとつは、「話し合い」に主眼を置いており、「動機付けまたは問題提起」はその「話し合い」を充実させるための手段である場合である。これには、「特別講演とゼミナールの組合せ型教授方法」「テレビドキュメンタリー番組の利用による教授方法」「グループ・ワーク型教授方法」が該当する。これらは、特別講演・テレビドキュメンタリー番組・バイオエシックスに関する社会問題と、話し合う方向性を提示する方法は違っていても、それらの知識をもとにして、小グループで話し合うことによって、死生観の確立に貢献しようとする方法である。そこで、この教授方法を「小グループ討議型」と解釈した。

一方、「動機付けまたは問題提起」である体験学習の方に主眼を置いており、「話し合い」は、その体験学習を振り返り強化する目的で行われている場合がある。これには「シミュレーションゲームによる教授方法」と「自分の死をイメージさせる教授方法」が該当する。これらは、人生終盤を模擬体験してみたり、人生最期の様子をイラストレーションにしてみたりと、自分の人生終盤から最期にかけての生き方に考えをめぐらせてみるのが最大の目的であって、「話し合い」はその体験をフィードバックし、補

強するために行われる。よって、このグループの教授方法を「模擬体験型」と解釈した。

これらをまとめて、表1に示した。

(2) 「小グループ討議型」「模擬体験型」教授方法と成人学習の特徴

生涯学習は、文字どおり生涯にわたる学習であり、子どもから高齢者までを含むものである。しかし、子どもたちの教育は学校教育に委ねる部分が多いため、子どもの教育と比較して、成人の教育の独自性を明らかにしようとする成人教育の理論化がなされている。そこで、今回看護教育の教授方法から抽出された「小グループ討議型」と「模擬体験型」の教授方法が、成人教育に有効な方法なのかを成人学習の特徴に照らし合わせて検討する。アメリカで成人教育の理論体系を樹立したノールズは、成人学習者の構造的特徴に基づいて教育モデルを体系化している。それによると成人学習は「成人は自己管理的であるから、自己の学習に対して自ら計画実施する責任をとり、成人はすでに種々の経験を蓄積しているので、教育サービスは第一義的には知識の伝達よりも自己の経験から学ぶことを支援すべきであり、

指導者よりも学習者自身が自己の学習の成否や達成度を評価すべきである。成人の学習は自己の生活課題や生活問題から発達し、これらをめぐって展開されるので、学習者自身が自己の生活の中から自ら学習課題を読みとり、自ら効果的に計画実施することを援助・促進するものでなければならない。」¹³⁾ といっているのである。ここに示された成人教育の特徴から、「小グループ討議型」と「模擬体験型」の教授方法について考えてみる。「小グループ討議型」は、グループ討論において各自の経験が発揮され生かされる。「模擬体験型」は、教えてもらうのではなく、これまでの経験をふまえて自ら模擬体験することによって、そこから学びとるのである。どちらも、学習者の主体的な行動が要求される。テーマは死であり、人間が生きていくうえで避けられない問題である。このように考えてみると、「小グループ討議型」と「模擬体験型」教授方法は、いずれも①成人学習者の自発的な学習を促す方法である点、②学習者の過去の経験が生かされる方法である点、③学習課題が生活に密着している点、において、成人教育の特徴を備えているといえるのではないだろうか。

表1 看護教育におけるデス・エデュケーションの方法—教授方法による分類—

	教授方法	動機付けまたは問題提起 ⇨	話し合い
小 グ ル ー プ 討 議 型	特別講演とゼミナールの組合せ型教授方法	特別講演	ゼミナール (毎回、問題提起者、司会、書記を立て討議する。)
	テレビドキュメンタリー番組の利用による教授方法	テレビドキュメンタリー番組	クラス討議
	グループ・ワーク型教授方法	講義および自らの問題意識	グループワーク (現在、社会問題となっているバイオエシックスに関わるテーマを選び、文献学習を行い、グループ討議を実施する。その内容をグループごとに発表し、全体討議を行う。)
模 擬 体 験 型	シミュレーションゲームによる教授方法	シミュレーションゲームによる老年期の模擬体験 (自分が生きたい年齢より5歳引いた年齢から、ゲームオーバーするまでを、「生活出来事カード」の指示に従って模擬体験する。)	討論 (体験者全員で、自分が最も印象に残ったことや他の人の体験に対して聞いてみたい内容等についての討論を行う。)
	自分の死をイメージさせる教授方法	自分の人生最期の様子をイメージし、イラストレーションを書く	なし 注：「終末期にある患者の看護」の講義の導入として、自分の終末期を考えるために実施された。

2. 各教授方法ごとの検討

次に、各教授方法ごとに、その方法を生涯教育に応用する場合の有効性と課題について考察する。

(1) 特別講演とゼミナールの組合せ型教授方法

この方法によると、特別講演によって問題提起あるいは話題の方向性が与えられ、ゼミナールへの参加動機が明確になる。さらに、ゼミナールで話し合う内容が漠然とせず、特別講演で得た一定の共通認識のもとで絞り込んだ検討が行えるという利点がある。これは、さまざまな背景や経験を持った人たちが集まる生涯教育の場においては重要である。このような、講義と討議の併用とよばれる教授方法は、学生に思考力を身につけさせる¹⁴⁾といわれており、知識を一方向的に受け取ることが目的ではない、生涯教育の場では適している。ただし、特別講演や講義の内容に何をを選択するか、さらに、それを熱意と感動をもって伝えることのできる講師の選定が問題になるであろう。また、その後に行われるゼミナールも、小グループでの話しやすさや他の人の意見が聞きやすい等の利点がある反面、そのような方法に不慣れな人も含まれる中で、一部の参加者のみが先導することのないように配慮が必要である。

(2) テレビドキュメンタリー番組の利用による教授方法

ビデオ教材の利用について、レバ・ド・トニエらは「写真に音声と動きが加わると、教授手段としてその有用性は一段と増大する。学生はより多くの感覚を駆使することになり、その結果、学習の保持と転移が促進されるのである。(中略)映画とテレビジョンは、より複雑で現実感のある刺激を教室にもち込む媒体として利用できる。テレビジョンやビデオテープを通して、臨床場面を教室にもち込み、討議や批判を行うことができる。」¹⁵⁾と述べている。すなわち、テレビドキュメンタリー番組のもつ現実感のある刺激を題材にして、討議や批判を行うことの有用性が述べられている。この方法は、生涯教育においても大いに活用できるのではないだろうか。テレビドキュメンタリー番組は感動が大きく、印象が鮮明である場合が多く、自分に置き換えて考えてみる等真剣な意見が出やすい環境を提供するであろう。ただし、ここでは、どのようなテレビドキュメンタリー番組を利用するかが大きな課題となる。参加者全員が関心を持ち理解できる内容のものでなければならない。さらに、取り上げたテレビドキュメンタリー番組をすでに見ている参加者がいる可能性もある。目的によって、不要な部分をカットすることも考えなければならない。また、視聴後の話し合いもその方法によって、学習効果が左右されるので

工夫が必要である。

(3) グループ・ワーク型教授方法

グループ・ワークは一般にもよく用いられる方法であるが、特にデス・エデュケーションのように解答のない教育、つまり各自の死生観を醸成することが目的であるような教育においては、他のメンバーの忌憚のない意見が聞けるこのような場合は、重要ではないだろうか。また、他のグループの発表を聞けることは、考える幅を広げることに役立つと思われる。主体的な学習活動が中心であるため、興味のある参加者は積極的に学習できる。しかし、グループ発表を行うためには、事前に問題意識を共有し、文献学習やグループ・ワークを行う必要があり、生涯教育として行う場合には、グループ編成や参加者間の時間調整が課題となる。グループ・ワークに積極的に参加しない人への配慮も必要である。

(4) シミュレーションゲームによる教授方法

シミュレーションゲームの学習効果についてレバ・ド・トニエらは「シミュレーション技法は、動機づけ、積極的参加、学習の妥当性や応用、知識の個人的発見、達成についてのフィードバックなどに関する学習の諸原理を統合するのに用いることができる」¹⁶⁾と述べている。すなわち、自分の人生終盤から死までを模擬体験することによって、死について考えることの必要性は確固として植え付けられるのである。これほど記憶の中に留まる体験もないであろう。生涯教育にこの方法を用いると、全員が必ず参加し体験するという利点が生じる。よって、実施後の討論も活発となり、効果をあげることが予想される。しかし、シミュレーションゲームの場合には、準備や場所といった物理的問題に加え、進行できる熟練した専門家の協力が必要という人材の問題がある。このゲームは臨場感がありすぎて精神的動揺をきたす参加者も出てくるために、精神的フォローができるスタッフが必要となる。ゲームであっても、実際に喜びや怒りや悲しみを経験するのである。つまり、条件を整えば、これほど人生終盤から死について考えざるを得なくする印象的な方法はないともいえよう。

(5) 自分の死をイメージさせる教授方法

イラストレーションの教育的効果については、ふつつ言葉だけで概念を理解するのは容易ではなく、自分自身で見ることができるようになるときに、より確信を得るものである¹⁷⁾といわれている。つまり、イラストレーションにすることは、自分の人生最期をただ頭の中で空想する以上に、現実感を伴うのである。イラストレーションを書くためには、具体的に自分の死について考えざるを得ない。それだけで

表2 看護教育におけるデス・エデュケーションの方法を生涯教育に応用する場合の有効性と課題

	教 授 方 法	有 効 性	課 題
小 グ ル ー プ 討 議 型	特別講演とゼミナールの組合せ型教授方法	<ul style="list-style-type: none"> ①特別講演によって、考えるきっかけが与えられ、問題点が明確になる。 ②特別講演を聴くことによって、ゼミナール参加者に共通の話題ができる。 ③ゼミナールは小グループであり、議論に参加しやすく、自分の考えを述べることによって、学習が深まる。 ④ゼミナールによって、他の参加者と意見が交わせ、個人で考えるよりも視点がひろがる。 	<ul style="list-style-type: none"> ①特別講演の内容が、ゼミナールに反映するため、講演者や内容の選定が重要となる。 ②ゼミナール形式に慣れない参加者への配慮が必要である。 ③特定の人による意見交換にならないように、ゼミナールを進行する必要がある。
	テレビドキュメンタリー番組の利用による教授方法	<ul style="list-style-type: none"> ①テレビドキュメンタリー番組は、通常参加者に感動を与えるため、印象が深く、内容を自分のことに置き換えて、真剣に討議する環境を作る。 ②番組の視聴後に、討議を行うことによって、印象が鮮明であり、様々な角度からの意見が出やすい。また、このことによって、各参加者の番組からの学びがさらに深くなる。 	<ul style="list-style-type: none"> ①目的にあったテレビドキュメンタリー番組を選定しなければならない。 ②参加者がすでに番組を見ている可能性がある。 ③番組の中で、不必要な部分はカットしておく必要がある。 ④意見交換の方法によって、学習効果に差が生じる。
	グループ・ワーク型教授方法	<ul style="list-style-type: none"> ①グループ・ワークは自らが問題意識を持って調べた内容を発表するという、自主的な活動であり、積極的に学習できる。 ②各グループが調べた内容を発表し、討議することによって、様々な問題点について考えることができる。 ③グループ・ワークの経験から、他のグループの発表にも興味を持って意見を述べることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ①グループ・ワークという作業を伴うために、参加者間の時間調整が必要である。 ②グループ内で同じ問題意識が共有されるとは限らず、グループ編成に配慮が必要である。 ③グループ・ワークに積極的に参加できないメンバーへの配慮が必要である。
模 擬 体 験 型	シミュレーションゲームによる教授方法	<ul style="list-style-type: none"> ①老いから死の過程を経験することによって、人生の終盤から終末にかけての人のあり方を考えることができる。 ②様々な模擬体験を通して、老人や死にゆく人への理解が深まる。 ③自分の人生の終盤から終末にかけてのあり方を、今から考えておかなければならない必要性が実感できる。 ④印象深い体験で、一時的なものに終わらず、機会あるごとに死について考える必要性を思い起こさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ①シミュレーションゲームを行うためには、物と場所が必要である。 ②シミュレーションゲームの進行ができる人材が必要である。 ③参加者の感情が高まる場合があるので、精神的にフォローできる専門家の参加が必要である。
	自分の死をイメージさせる教授方法	<ul style="list-style-type: none"> ①死を人ごとではなく、自分のこととしてリアルにとらえるきっかけとなる。 ②自分の死について、考えておかなければならない現実を知ることができる。 ③自分の死を考えることは、結局は人生設計から捉え直さなければならず、人としてどのように生きていのかを、見つめる機会となる。 ④他の参加者のイラストレーションや意見から、多様な考え方を知ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ①イラストレーションを書くことのできる場所が必要である。 ②突然言われても書けないという参加者への、配慮が必要である。 ③イラストレーションを真剣に書けるような環境の調整が必要である。 ④イラストレーションを見せたくない人への配慮が必要である。

はなく、自分の人生設計そのものから捉え直さなければ書けないのである。よって、生涯教育に応用する場合には、今後の人生を考える時に死のあり方が深く関わってくることを知る良い機会となるであろう。また、他の参加者のイラストレーションをとおしてさまざまな考え方にも出会える。これも、全員が必ず参加するという利点があるが、一方で参加者はイラストレーションを書ける状態にある人に限られ、会場もイラストレーションを書くことができる場所に限定される。また、人生最期の場面をイラストレーションにするため、すぐには書けない人への配慮や、真剣に取り組めるような環境の調整が重要である。さらに、場合によってはプライバシーに配慮する必要が生じる。

以上、教授方法別に考察した有効性と課題をまとめ表2に示した。生涯教育に応用するにあたり課題も多くあるが、看護教育からの応用であり、看護者が経験を生かして関わることによって、実施の可能性はあると考えられる。

おわりに

看護教育の中で実践されているデス・エデュケーションの方法を調査したところ、数は多くないが工夫をこらした教授方法が抽出された。これらの教授方法は、一方的な知識の伝達による教育ではなく、

共通して「動機付けまたは問題提起」から「話し合い」へという過程をたどっていた。学習者自らの学習意欲を促し、経験を生かして主体的に学習できる方法であり、成人教育に適した教授方法であることが示唆された。さらに、個々の教授方法が実際に生涯教育に応用される場合の有効性と課題について考察した。実践時に考慮を要する点はあるものの、効果も高いと考えられた。看護教育においてすでに実施されている教授方法を応用するのであるから、看護者が関わることによって、生涯教育の場においての実践が容易になると思われる。

また、看護者にとってもデス・エデュケーションに関わることは重要である。看護者は、自分の死生観を確立しておくことも必要だが、さまざまな人の持つ死生観も理解しなければならない。そのためにデス・エデュケーションに関わることは、多くの人の死に対する考え方に出会う機会である。看護者がこの機会に学習すれば、それは望ましい看護ケアとなって患者にかえって行くであろう。このような良いサイクルとなって看護者が関わるデス・エデュケーションが実施され、発展することを期待するのである。

本論文の要旨は、第25回日本看護研究学会学術集会(1999)において発表した。

文 献

- 1) 關戸啓子(1999)生涯教育としてのデス・エデュケーションの必要性—わが国における死の看取りの変遷をとおして—。川崎医療福祉学会誌, **9**(1), 61-68.
- 2) 關戸啓子(1999)生涯教育としてのデス・エデュケーションの現状と課題。川崎医療福祉学会誌, **9**(2), 209-216.
- 3) 木村正治(1990)大学生を対象にした「死の教育」(Death Education)の実践とその評価。学校保健研究, **32**(9), 443-450.
- 4) 永野光子, 鈴木純恵, 太田澄恵(1994)看護学教育の教育方法に関する研究動向と今後の課題・1—授業方法の開発等に関する研究に焦点を当てて—。看護教育, **35**(10), 798-803.
- 5) 日本看護協会編(1995)最新看護索引'94, 日本看護協会, 東京。
- 6) 日本看護協会編(1996)最新看護索引'95, 日本看護協会, 東京。
- 7) 日本看護協会編(1997)最新看護索引'96, 日本看護協会, 東京。
- 8) 小熊厚子, 加藤愛子, 山田皓子(1995)「死の準備教育」にゼミナールと特別講演を導入した試み。看護展望, **20**(7), 802-807.
- 9) 山本捷子(1996)テレビドキュメンタリー番組の教材としての利用法。看護教育, **37**(4), 285-288.
- 10) 關戸啓子, 渡邊ふみ子, 太湯好子, 杉田明子, 田邊和代, 酒井恒美(1994)看護学生の生命観に影響を与える要因—脳死と臓器移植に焦点を当てて—。日本ホスピス・在宅ケア研究会雑誌, **2**(2), 144-148.
- 11) 佐藤弘美, 湯浅美千代, 田川由香, 正木治恵, 野口美和子(1996)「老年期を生きる」を理解する授業の展開—シミュレーションゲームを用いて—。看護教育, **37**(4), 280-284.
- 12) 岩谷澄香(1992)学生の「死」に対するイメージ。日本看護学校協議会雑誌, **23**(2), 123-126.
- 13) 池田秀男(1990)アンドラゴジー。日本生涯教育学会編, 生涯学習事典, 初版, 東京書籍, 東京, pp26-29.
- 14) レバ・ド・トニエ, マーサ・A・トンプソン(中西睦子, 荒川唱子訳)(1993)看護学教育のストラテジー, 初版, 医学

書院，東京，pp99-100.

15) 前掲書 pp109-110.

16) 前掲書 pp31-32.

17) 前掲書 p24.

(平成12年 4月28日受理)

Methods Used in Educating Nursing Students about Death and their Application to the General Population

Keiko SEKIDO

(Accepted Apr. 28, 2000)

Key words : NURSING EDUCATION, DEATH EDUCATION, CONTINUING EDUCATION,
TEACHING METHODS

Abstract

Some of the methods used in educating nursing students about death were investigated. The following procedures were utilized in teaching the students: (1) combined lectures and seminars, (2) television documentaries, (3) small group discussions, (4) simulation games, (5) imagining one's own death by drawing simple drawings.

The possibility of applying these five teaching methods to the general population was considered. Each teaching method has a few drawbacks when applied to the general public, but it seems possible that they can still be effective in educating lay people about death. If these methods are to be used, people involved in nursing education, such as teachers and graduates of nursing programs, should be a part of the educational process. After all, the methods are a part of nursing education.

Correspondence to : Keiko SEKIDO

Department of Nursing, Faculty of Medical Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan

(Kawasaki Journal of Medical Welfare Vol.10, No.1, 2000 71-78)